

素人の木工

携帯電話立

くみき じんじゃぶっかく
組木は神社仏閣に使われている伝統技術であるが、極めて高度な技術が必要である。しかし、ドリルで開けた丸穴に、円筒形の端部を差し込む組木は、比較的容易に作れる。

別途紹介しているように、多少の専用治具が必要になるが、実際に使用できるものを作れば、こんな楽しいことはないと思う。

携帯電話の多くは「スピーカーフォン」が使える、電話立があれば手放しで通話できる。ぜひ楽しんで頂きたいので、館長の携帯電話のサイズに合わせた電話立の型紙を紹介する。

石井未来館館長 石井峻

<http://ishii-miraikan.com>

携帯電話立の型紙

ページ 2 目に型紙を掲載した。両面印刷すれば裏面にあたる。全く同じではないが、作品例を右の写真に示した。館長の携帯電母、暑さ 10cm 幅 70cm に合わせている。杉の端材を手に入れて、表面に糊付けし、型紙に合わせて加工すれば、垂直または後継した姿勢で、携帯電歯を保持できる。後部に差し込んだ「脚」を回すことで、立てる角度が変えられる。

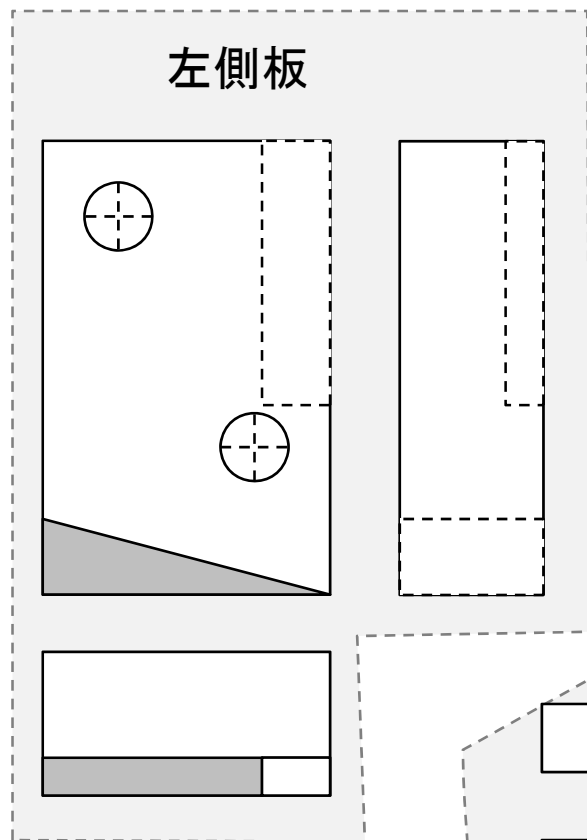


注意点

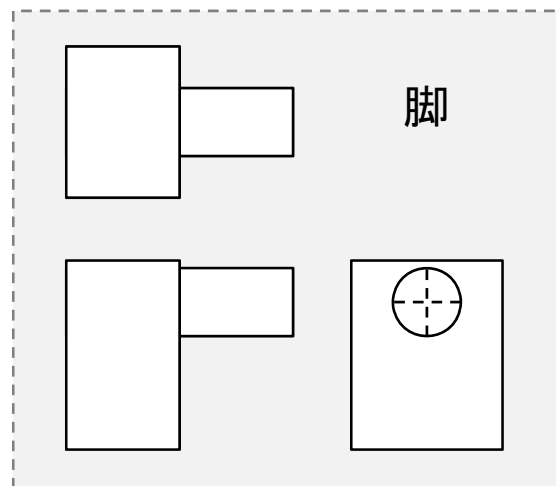
木材の方向に気を付けることがまず肝要である。円筒形の軸に木の繊維が向いていないと、小さな力で折れてしまう。「主体」と「脚」はこれに気を付けなければならない。左右の側板は繊維の方向を自由に選べるが、木口(年輪が見える切口)を上下に選ぶと美しく仕上がる。

加工が難しいのは、主体の両側面の各二本の軸である。円筒面を鑿やすりで加工するとき、鑿の先端がもう一本の軸に当たりがちになる。その為、二本の軸の間隔をできるだけ離している。また、左右の側板に空ける孔の位置も、正確でないと軸を差し込めなくなる。ドリルを使う前に、孔の中心にポンチ穴を空けると良い。

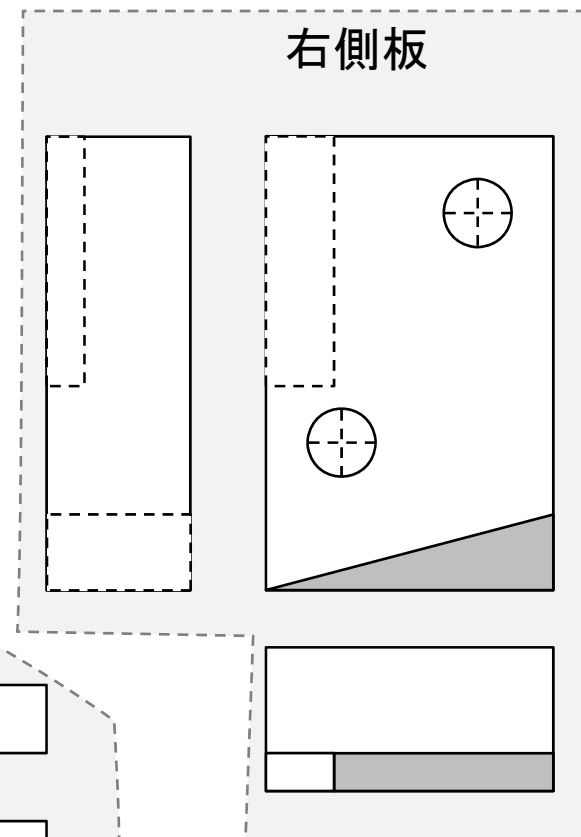
左側板



携帯電話立て 部品図



右側板



主体

